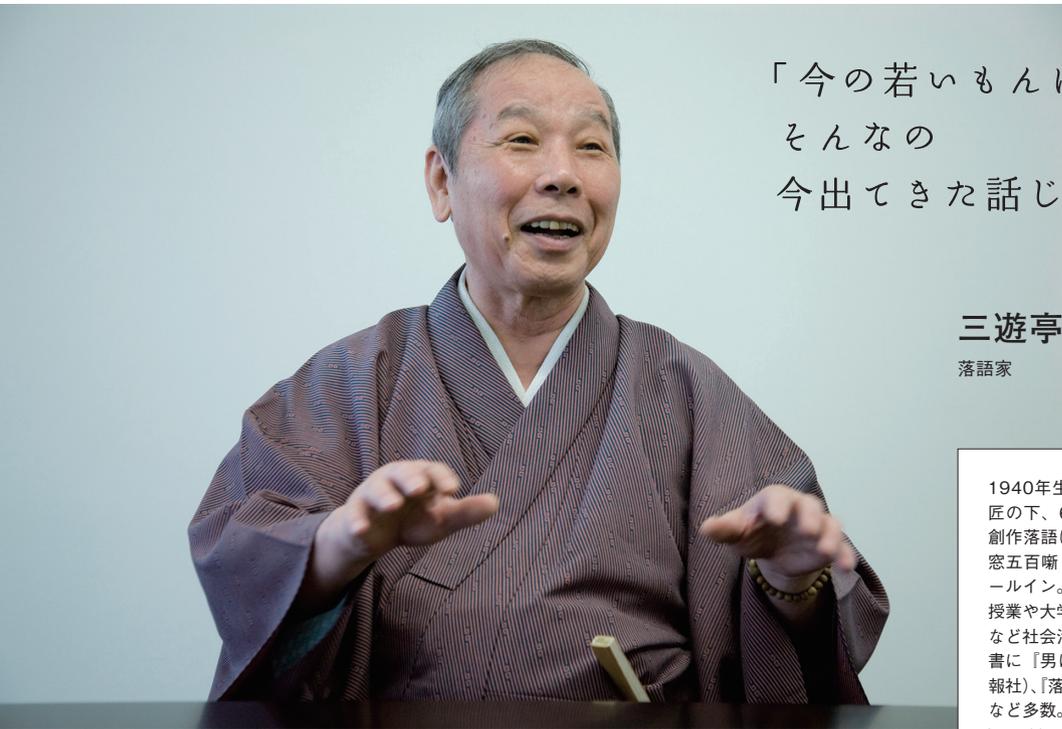


(今回のお題)

落語界に学ぶ、若手との関わり方



「今の若いもんは」なんて、
そんなの
今出てきた話じゃないですよ

三遊亭圓窓師匠

落語家

1940年生まれ。6代目三遊亭圓生師匠の下、69年真打昇進。古典のほか創作落語にも力を入れ、2001年「圓窓五百噺を聴く会」を28年かけてゴールイン。最近では小学校での落語の授業や大学非常勤講師、企業での講演など社会活動にも力を注いでいる。著書に『男は40代に蘇る』（東洋経済新報社）、『落語の授業』（少年写真新聞社）など多数。
<http://www.ensou-dakudaku.net/>

■ 「芸」への信頼だけが師弟を繋ぐ

落語の師弟関係には金の繋がりがありませんよ。ただで教えたで教わる。だから師匠は「頼んで来てもらったわけじゃないよ」って、圧倒的に立場が強い。じゃあなんで繋がってるかという、サラリーマンはサラリーっていうくらいだから給料なんでしょうけど、我々は芸への信頼なんです。自分で選んだ師匠だっていう。「今の若いもんは…」なんていうけどね、そんなの今出てきた話じゃない。先輩が蓄えた知識で後輩を育てるのは有史以来の繰り返しで、小言言われてクレちゃう子はいつだっている。言うほうも気分悪いんだけど、言う人はいないとダメなの。だからね、あたしたちは「小言じゃないよ、教えだよ」って叱るんです。教えなんです、落語の歴史300年の。怒るのとは違いますよ。「叱る」には教えや愛があるけど、「怒る」には感情が入っちゃうからいい結果を生まない。

■ 説得と納得に誤差はあって当然

落語という話芸は、頭の中に舞台や登場人物を思い描いてもらうバーチャルリアリティだからね、こっちは説得力なんだけど相手には納得力なんです。そこには当然誤差がある。弟子もそうですよ、100%を期待しちゃいけないんです。金子みすゞの詩じゃないけど「みんなちがって、みんないい」。会社だって、だから会議室があるんでしょ？ 意見の違いを縮めるために。下の人が意見を言いづらい会議なんておかしい話です。あたしは新しいことをやる時はとりあえず弟子に聞くの、ほかにアイデアないかって。上の者にあるのは、最終決定する権利くらいなんじゃないですか。「おまえごときが10年早い！」なんて言う人は注意しないと。下の人のほうじゃ「10年遅れてる」と思ってんだから、合わせると20年の差ってことだからね（笑）。